

# 大庭葉蔵入水因論議私見

## —— 太宰治論の交通整理 ——

大 森 郁 之 助

### I

大庭葉蔵、とは、いうまでもなく昭和十年発表の「道化の華」に登場し、そして十三年後「人間失格」でその後日談を語られることになる、太宰治の作品の代表的主人公の名である。名を記さず、又は別の名で、しかし類想と解される投身心中を描かれている場合をも合わせると、その登場は「葉」（昭9・4発表）「虚構の春」（昭11・7）「狂言の神」（昭11・10）「東京八景」（昭16・1）にまで拡がるから、太宰の作品史と共に歩み続けたキャラクター、とも、言いたければ言うてよからう。しかし「入水因……」という後半は余り本格的・本質的な問題とはいえないかも知れなくて、つまり大庭葉蔵が死を決する真因といったことではなく海に身を投ずるという方法を選ぶ事情（についての論議）を、意味している。

ところで、そういう問題に対しての予想される結論は「作者にとつて、投身という方法がこの主人公（又はこの死）のイメージに最も適合すると思われたから」といったことになるのが常道で、ただその、投身が最も適合する主人公（又は死）とはどのような人間像（どのような性質の死）であるか——どのような人間像であるゆえに投身が適合したのか——という、狭義の作品分析が考究の内容（論文の眼目）

になるのが通常と思われるのだが、事、太宰の大庭葉蔵に関してはそういう方向への展開を阻み、脇道（というよりむしろ道路から外れた密林中）へさまよい出させようとする考え方があって、かりに真直ぐ進みたくてもそれを脇道と判断して通り過ぎる理由を自他に對して確認してからでないと不安だ、という特殊事情がある。

脇道というのは、この主人公の行動（投身、という）選択の最も根本的な要因を作者太宰の制作意図、構想、等々、いわば作品について、の思考の中に探らず、太宰の私生活事実という、作品以前、思考の外に於て決定してしまっているものに求めようとする態度である。

「道化の華」及び「人間失格」がその骨子或いは外形に於て太宰の私生活像に對應している（骨子の対応と外形の対応では大分違うが）、ということとは——又は、対応するものと受取られるように仕立てられていて、と留保を付せば——更めて議論を要すまい。とすると「道化……」の場合はむしろ逆に、なぜなら、ばくからというべきだろうが、主人公大庭葉蔵が相州江の島に近い「袂ヶ浦で」女と「一緒に身を投げた」（「道化……」）とか「鎌倉の海に」「一緒に入水した」（「人間……」）というのは、舞台となる土地と、「道化……」に先立つ体験という点から、昭和五年十一月二十八日夜半鎌倉郡腰越町小動崎の海岸で田部シメ子（通称田辺あつみ）女と共に死を図った事件に對

応している筈である。もっとも、事件が対応しているからといって全てのディテールの一致までは推断できないわけだが、作者の死後伝記的知識が体系化されてゆく中で、実生活上の事件の方も作品中の設定と同じく「有夫の女と鎌倉の海に投身し、女ひとり死す。自殺幫助罪に問はれ、起訴猶予となる」(昭28・12『文芸』太宰治文学碑建立記念・太宰治特集号、小山清編「太宰治年譜」傍点引用者)というものであった、ということになると、そうした深刻な体験に基づいての造型だったのならそれ以外の造型Ⅱ死の方法の変改などあり得なかった筈(なぜ入水かといった問題提起は無意味)、といった、後追いの必然論が押し出て来る。

ここで些か不審なのは深刻な体験の変改がなぜあり得ないのか——変改を企てても実現は不能という、霊の呪縛風な話なのか、そもそも変改しようという気が起る筈がないという、意力減退の問題なのか、その辺の識別が、この立場の殆どの論で曖昧なままに先へ進められていくことである。もっとも、どちらの意味にしろ、それならなぜ小説Ⅴにしたのか・それなら小説ではあるまい、という正論で斬り捨て得るので、それではいくら正論とはいえ余りに抽象的原則論にとどまり過ぎるとすれば、具体的な反証として、例えばその深刻な体験に於ける犠牲者(太宰からいえば己れを加害者とする被害者)たる相手の女性が、故郷は「南のはづれ」で夫は元小学校の教師(「道化の華」というのと、広島出身で夫は床屋だった(「人間失格」というのと、どちらかは体験事実通りだとしてももう一方は変改をなし得ているわけだという、明瞭な事態を挙げ得る。前述、大庭葉蔵と名のらないだけの類想作品をも見比べるなら、季節については「十二月のをはり」(「道化……」)「師走」(「狂言の神」)「歳末」(「東京八景」)と、はっきり事実と違える方がむしろ多く、入水の際も、女が借り物の帯をほどこいて「きちんと畳んで、背後の樹木に垂れかけ」(「虚構の春」)た

り「畳んで岩の上に置」(「人間……」)いたりするのと、「コートを着たまま」(「狂言……」)というのとの幅がある。

勿論、女の身の上々と死の方法とでは、主人公自身の事かどうかという直接性、軽重の差はあるから、如上の変改がある以上死の方法も変改されている筈と迄は云えない。しかし逆に、死の方法だけは変改不能(又は不可)と、特別扱いを主張する根拠とするには抽象的すぎる。そこで論より証拠、実際に作品間の変動はというと、「虚構の春」で「飛びこむよりさきにまづ薬を呑んだ」とするのみで、他の作品では全て単純な投身であり、いいかえれば「虚構……」を含めて全作品共通して投身はしている。作品間の変動がないのだからこれは作品毎に異なる筈の作意が関わることなく、素材のままに造型された結果と見るべきで、女の身の上などと違って変改し難い、強烈な印象と作品化への拘束力を持つ要素だったのだ——という説明を、しばしば聞く。しかし作品の要約だけで済まらず個々の本文に即して考えるなら、「虚構……」では服薬の結果としての海岸の岩の上での苦悶が約二百八十字を費して描写され、その苦悶の結果として「岩からてんらく」する、結果論的な投身になっている。つまり、「飛びこむよりさきにまづ」という頭初めの意図に反して実際には遂に飛び込んでいないのであるから、主人公の意図は意図として、実現した結果からいうならばこの心中未遂に於ける服薬は添加要素や補助行為ではなく、むしろ主要素と感じられる描き方であり、それを含まぬ他の作品との差違はかなり大きい。作品間の変動回数は少ないが変動幅は決して小さくないともいえる。要するに体験事実としての投身と作品形象としての投身とは、必ずしも確実強固に結び付いていないというのが、ほぼ昭和三十年代末迄の、伝記的知識と作品本文を公正に検討した場合に下されるべき判定であった。

ところが、前に引いた昭和二十八年公刊の小山清作成年譜は、長篠

康一郎氏が精査した太宰年譜の詳細正確化の段階（昭44・3虎見書房刊『人間太宰治の研究・Ⅱ』『太宰治の年譜（変遷史）』）でいうと昭和五年の心中未遂を「入水」と明言した最初のもので、その前段階、「この年の末、『道化の華』の事件があった」（昭24・11六興出版社刊、檀一雄『小説太宰治』巻末・戸石泰一編「年譜」）と直接事実についての判断を避けた形に比べれば大進歩といえるものの、記述内容の正誤からいえば勇み足だったかと思われる。即ち昭和四十年代に入って前引長篠氏・相馬正一氏によって事件当時の新聞報道が紹介されたが、そこでは一様に投身ならぬ睡眠薬（カルモチン）心中として、些かの疑いも持たれてはいなかった。中央紙では

東京朝日新聞 昭5・11・29発行（30日付）夕刊

〔鎌倉電話〕青森県北郡金木町素封家同郡県会議員津島文治氏弟東京市外戸塚町諏訪二五〇常盤館止宿帝大生修治（二二）及び銀座十字屋楽器店裏ハリウッドバー内田辺あつみ（一九）の両名は二十八日朝家出同日午後五時頃相州腰越小動神社裏海岸でカルモチンをのみ情死を計り二十九日朝八時頃苦惱中を付近の漁師が発見女は間もなく絶命男は腰越恵風園に収容したが一命は取止めるらしい

東京日日新聞 同右

〔鎌倉発〕相州腰越小動神社裏海岸に廿九日午前八時ころ若い男女が催眠剤をのみ倒れてゐるのを発見、七里ヶ浜恵風園療養所に収容手当の結果男は助かったが女は死亡した、右は青森県金木町旭山四一四津島文治弟で東京市外戸塚町諏訪二五〇常盤館方帝大文学部仏文科三年生対馬修治（二二）女は銀座ホリウッド・バー女給田辺あつみ（一九）で女が男の病気に同情し情死したものである

又青森の地元紙も関連記事や以後の続報は詳しいが事件そのものにつ

いては殆ど変わらず

東奥日報 昭5・11・30朝刊

〔鎌倉電話〕二十九日午前八時頃相州腰越津村（マツ）不動神社裏手海岸にて若い男女が心中を図り苦悶中を附近の者が発見七里ヶ浜恵風園にて手当を加へたが女は間もなく絶命男は重態である鎌倉署にて取調べた結果右は青森県北津軽郡金木町県会議員津島文治氏弟東京府下戸塚町諏訪二五〇常盤館止宿帝大文科第一学年学生津島修治（二二）女は銀座ホリウッドバーの女給田辺あつみ（一九）でカルモチン情死を図つたものであるが原因其の他は不明である

いずれも表記上の誤脱等はあるが、この種いわゆる三面記事では無名人の当事者の名や身元などは言わばどうでもよく、それよりは殺人か自殺か投身か服毒かといった事の方が遥かに重要なわけで、校正の不備から記事内容の信憑性を疑うのは牽強付会というものだろうし、政治記事や国際関係、公安関係等と違って、官憲の圧力（恐らく警察種だろうが）とか現在の某大新聞のような意図的歪曲も想像し難い。よほど強力な反証でもない限り、各紙揃つての誤報といった異常事態を仮定するのは難癖というものだろう。

前引長篠氏は更に事件現場の地形の実地踏査や太宰が収容された結核療養所恵風園の担当医師からの聴き取り等、直接資料の収集を精力的に続けて、新聞報道は「何かの間違い」などではなく、まさにカルモチン心中以外ではありえないことを論証し來った。氏自身は未だにそこに究明された結果に対する所謂学界の無理解を折ある毎に嘆じているが、大勢としては、その公刊開始後十年を出ずして国文学界での太宰研究の主流メンバーからも「カルモチンによる服毒心中であったことは今や伝記的常識」（昭49・10刊『日本近代文学』21集、東郷克美氏『「お伽草紙」の桃源境』）と手放しの承認をうけて、まず順調に基本的認識となつていくように思われる。

しかし一方では、特に根拠も示さぬまま「長篠康一郎氏の精査にもかかわらず、私は、いわゆる江の島入水事件の事実の確定をいまだに信じ得ないでいる」(昭51・5『国文学』、平岡敏夫氏「その収束するところ——『人間失格』を中心に」)と居直る研究者も、少数派かとは思いますが確かにいて、その「信じ得ない」理由は、前後の叙述から察する限りでは(他の理由なら明示しない方に責任がある)太宰の作品に広く現れるへ水のモチーフVの特異性・反復性であり、端的にいえば、このようなモチーフが実生活体験と結びつかずに生ずるものとは考えられないということかと思われる。しかし、体験事実そのものについて殆ど知られていなかった時期に『道化の華』はもとより『魚服記』をはじめ入水死のイメージが太宰の作中に強烈なリアリティをもって描きつづけられていたから「長い間入水心中と考えられてきた」(『短歌』昭61・3、笠原伸夫氏「書評・岩城之徳『石川啄木伝』」)のは、とくに作品上の虚構と推定すべき理由がない以上、余り、責められないこと(当然のこと、とは云わない。作品の印象から自然に作者の実生活等々を想い描くのが無条件に正当なわけではないから)だろう。だが、これだけ明確な(無謬かどうかとは別のこと)反証が集められて猶且つ、作品の印象からして私生活事実はかくあるはずと思ひ得るなら、これはもはや文学作品と作者の実生活の関わりについての信念の問題、或いはその信念を以て客観的証拠の採否の基準とするという、根本的な研究態度の問題であって、太宰という作家や「道化の華」etcといった作品の個別研究・調査がこれから先も進んだところで、その結果としての服薬説への賛同は期待し難いのかも知れない。

又、そうした研究者の信念(?)とは別に、昭和五年の事件に直接の関わりを持った、いわゆる当事者の回想・証言にも、投身と記憶し

ていて疑いを持たない態のものが少なからず有る。しかし、これまた

長篠氏らが詳細に指摘していることだが、それら回想・証言は或いは相互間で、或いは疑い難い客観的情報との間で、しばしば大きくいちがいをさせており、当事者の記憶という条件だけではそのすべてを信じ得ないことを示している。

例えば、太宰を恵風園に見舞ったという人々の記憶は、事件後の太宰の状況についてはそれこそ一等資料でありそうだが(事件そのもの、心中の方法や場所等は、それらの人々も太宰本人を含む他人から聞くしかないわけで、我々との差は情報源への相対的な近さにとどまる)、その立場で最も能弁な中畑慶吉・小館保両氏の証言も次のように重大な疑念を抱かせる。中畑証言としては、杉森久英『苦悩の旗手 太宰治』(昭42・6文芸春秋刊)に氏からの聴き取り(?)として述べる中の

①(鎌倉へ着いてみると)太宰は病院に収容されていたが、これほどの大事件を起しながら、打ちひしがれた風もなく、反省の色もみえず、看護婦に冗談をいって笑わせたり、ふざけたりしていたので、中畑氏はあきれ返った。

②中畑はこの問題の処理のため、鎌倉じゅうを駆けまわった。女の死体をさがすためやとった漁船には、一艘につき三十七円も払わねばならなかったし、出動した青年団にも、礼をしなければならなかった。

という二点を取り上げてみると、①は、東奥日報十二月一日夕刊にまだ「依然として重態」、二日夕刊で漸く「二命をとりとめる見込みが充分」という程度の太宰が、国元の長兄文治氏が「一切を任せ」「急行」させた筈の中畑氏の到着時(三十日か、一日か?)に笑い興じるまでに恢復していたということの不審、②については女も男と同時に「付近の者(又は漁師)」が発見、収容したとする新聞報道との大差を、相馬氏が指摘している(昭43・3筑摩書房刊『若き日の太宰治』「罪

の意識の発生」六)。

**補説** なおその他に、入水死として述べていることや、「女の内縁の夫」を「貧しい画家」としている(長篠氏の調査によれば事実は無名の演劇青年《昭56・4 広論社刊『太宰治七里ヶ浜心中』》ことも杉森文としては気になるが、前件は中畑談としてではなく、後件は中畑氏も夫に会ったとしてもその職業は伝聞かも知れない。画家云々は他の証言者も多いので、相馬氏は太宰の空想か、太宰の同情を引くための女の作り話を、太宰が語ったものと推定している(昭57・5 筑摩書房刊『評伝太宰治・第一部』「義絶とその周辺」三)。

小館証言としては、「鎌倉恵風園の思ひ出」(昭30・10、筑摩書房版太宰治全集月報1)に

①「道化の華」に「書いてある一節一節の出来事も、篇中の人物も全くその通りその儘」というから、見舞の友人は「飛驒」に相当する小柄な「漆工家」と「小菅」に相当する小館氏自身(小菅が郷里の温泉宿で深夜廁へ新調の外套を着用して行ったら云々の失敗談を、「事実」は《略》私が鎌倉の現場へかけつけた最初の夜」の話だ、とする。もし小菅が小館氏でなければ小館氏は作品中に登場せず、事実「その通りその儘」とはいえない)の二人だけだったことになる。

②入院中「作品よりも事実をもつともつとお道化で、笑ひころげて四日間を過し」た、と、入院期間も作品通りとする。

①の「飛驒」に相当する漆工家とは後掲別文に「恵風園の一室で(略)上野美校の学生葛西信造さん等と共に、寝泊りした楽しい幾日」とある葛西氏かと思われるが、平岡敏男氏「道化と真実」(昭23・7・4『サンデー毎日』)によれば葛西氏は平岡氏と共に二十九日夜(その日の夕刊)で「帝大生情死未遂」という記事を見て「その晩、とする」

駆けつけ、「二晩か三晩そこで泊った」という。小館氏も「道化の華」通りとすれば恵風園収容第一日の中に着き、平岡・葛西氏とぶつかった筈。ところが葛西氏のみを取り上げて、平岡氏に相当する人物の出て来ない「道化……」を「その通りその儘」と肯定しているのはおかしい(平岡文の方は出会ったすべての人物を挙げなければならぬ性質の物ではないが)。小館氏は後年「へごろは、どこに、どうして、おりますか」(昭52・6『桜桃』)では「道化……」の看護婦「真野」に呼びかける形で「葛西も、中貞も、根市も亡くなっている今」とか「どうか(略)中貞さんを思い出し」とか、中村貞次郎・根市(同文後出の良三?)氏らも「真野」と面識がある『そこに居合わせたもののように書いているが(但しここでも平岡氏にはふれず)、それなら「道化……」は更に大幅に登場人物を整理しているわけで、前言を裏切ることになる。

②の「お道化で、笑ひころげて」云々は中畑証言と同断だが(前引平岡氏の別文「遂に散った道化の華」《昭23・8『新聞記者』》では「太宰の割に元氣な明るい顔を見て、安心し」「たあいな雑談をし」た、とする《長篠氏『太宰治七里ヶ浜心中』所引》、更にその期間を「四日間」とするのは「道化……」での設定に一致し、東奥日報十二月七日朝刊に「近く退院の筈」とある(誤報とは考え難い)のとはくいちがう(相馬氏、『若き日の太宰治』『罪の意識の発生』六)。

**補説** なお、小館氏が両文で懐しんでいる「真野」の実在について、長篠氏は「それほど重態とは診ていないので、(病院側で)看護婦を付添わせるといふことはなかった」(『太宰治七里ヶ浜心中』『腰越事件』)と疑問を呈しているが、別に氏自身恵風園の元院長中村善雄博士から恵風園の看護婦ではあり得ないが、患者側で働いた看護婦かも知れないという趣旨の答も得ており(昭57・6 広論社刊『太宰治水上心中』『証言・太宰治の自殺と心中』、

「道化……」でも「病院からの呼び出し」云々としていたので、筋は通ろう。

以上、中畑・小館証言で事実と反すると見られる条が、しかし「道化の華」とは合致する点については、「おそらく長い年月の間に（略）『道化の華』を一種の実録と思いこんでしまい、それを自分の体験と結びつけることによってミックスされた別の記憶を作りあげ」たため（相馬氏、同前）と考えるのが納得しやすからう。

ところで、実際に立ち会った場面、携わった行為の記憶でさえもそうなら、死の方法や現場についての記憶は、それを受けた場所や時点が情報対象や情報源に極めて接近してはいたにしろ所詮は伝聞知識の記憶であって、狭義の自身の体験の記憶ではない。さらに情報に対する関心の性質や程度からいえば、いかに親密な友人知人で我が身のように気遣われたにしろ、その相手の身は既に救出されて事件の現場にはなく病院の介護下にあるのだから、現場や死の方法についての情報は安否の気遣いからは外れて、いってみれば好奇心の対象に近いものではなかったか。友情や親愛の度が、そのまま記憶の信憑性にはならないだろう。

と、言った後では御都合主義に聞こえそうだが、同じように割引いて聴くべき事情は太宰の親族姻族、いわゆる身内の人々の記憶についてもあるものの、親しい友人の証言が単なる同級生のそれよりは通常重んじられるような意味での優位性は認められようし、質的にも身内の者としての関心は自分と交渉のある面や交渉の生じた時点以降にとどまらず、時にその個人の本质とは余り関わりない形式的・外面的要素、一族内の役割や社会的地位等にも及ぶ（どちらがハ真のV人間のつながりか、といったことは別）。普通に云う意味とは違うが文字通り全人的、いいかえれば網羅的であって、現前の事物でない死の方法や現場についての情報への関心も、友人の場合とは強弱以外の差もある

のではない。そうした特殊性も考慮されよう身内の証言で、珍しく情報の受け放しでなく解釈を加えたものを相馬氏が採取している（「義絶とその周辺」三）。兄姉中で太宰と最も親しかったという（昭62・1『国文学』、「対談・太宰治と津島家の人々」での津島康一氏の発言）末姉きょうの夫小館貞一氏（保氏の兄）は、代わって病院へ出向いた妻の話として（であろう）

睡眠薬を飲んで入水したという報告でしたが、いくら鎌倉は氣候がいいといっても、十一月下旬ですからねえ、海に入ったら助からんでしょう。それにあの辺は割と人目につきやすいところですから、本当に入水したのかどうかは疑問です。（昭55・8・8談）と、入水に否定的である。同氏は当時結核療養のため同じ鎌倉に転地中だった由で、他の縁者知人達よりも現地の氣候・地形に通じていた為、情報内容の客観的な合理不合理を吟味し得たわけだろう。この海水温に対する判断は、前引恵風園の中村博士が長篠氏の間に答えて「この辺は一、二月でも氷も張らず、マイナス一度になることは珍しい。まして畳岩（事件現場に擬せられる海岸の大岩）の上なら暖い」と証言している（「証言・太宰治の自殺と心中」）のと、補い合う関係になろう。

入水説が生理学的に成立困難だ、という判断が、もし確定すれば、水掛論的な文学研究者の論議は否応なく決着させられてしまうかも知れないが、順序としてその前に注意したいのは、津島家を代表して鎌倉に出向いた太宰の次兄英治氏も小館貞一氏同様「カルモチンを呑んで海に飛びこんだということでした」と語っていて（昭43・12・17談。相馬氏「義絶とその周辺」三）、実兄と実姉が現地で得た情報——知らせる側も念を入れたであろう情報がハ服薬後V入水型だったらしいことであり、次に、その情報が、一見「道化の華」型V単純入水型の認識で埋まっているかにも思われたいわゆる当事者・関係者の、その

真々中の最近親者達に、大筋として納得されていた、ということである。

ところでこの型は作品中では「葉」から「人間失格」までの六回中「虚構の春」のみ（前述）、その上、「太宰さん。（略）これは勿論（略）みんな私の身の上だ」と第三者の身の上に託した後、じつはこれは「ずつとまへに」太宰が「教へて呉れた」話だ、と攪乱する。勿論或る意味ではこの「清水忠治」と名のる人物も太宰の分身の一つといえようが、形としては、名前や素姓・風采が違っているなどというのとは段のちがう、紛れようのない他人である。昭和五年の事件がこれに近いものだったとすれば、太宰は自らを主人公とした多くの場で体験事実と違って造型し、自らを主人公としない形で体験事実をほぼ告白していることになる。

そしてこの常識とは逆の書き分けという仮説は、輶晦と告白と、相反する二つの願望に対応する、或る型の作家に於ては必然的な制作原理を示唆しようか。端的にいえば（ここ迄来れば言う必要もなさそうだが）、太宰は、これこれの事実があるの、で、こういう作品を書く、と（及び、その逆）因果関係をあてはめられるような——又は、因果関係が一目で判るような、生優しい相手ではないようだということがある。

## II

脇道への気の迷いを封ずるという、問題全体からみれば準備作業のために、手間をかけ過ぎたろうか。しかしそれが済めば、後は、作品本文という特定のことばの組み合わせとして定着しているもの、明確に表わされているものを、従って反面からいえば或る定められた範囲内、限定下で、理解する作業である。坦々とした一筋道とはいえなく

とも見通しはつく作業、少なくとも、いつどこで異次元空間（いろいろあろうが例えば作者の私生活事実という）に繋がって吸い込まれてしまいか判らない、といった類の不安はない、一定次元内での作業ではある。

そういう作業でよい（軽んじているわけではない）、それに専念すればよいことが確認されれば、問題全体としても半ばは片付いたといってもよいのではないかと思うが、しかし確認を云うには未だ見残しがある。それは前節で見たような△葉蔵の入水▽を△太宰の投身▽と直ちに繋げる考え方とはやや異なり、△葉蔵の入水▽を、その他の作品に入水以外の形で現れる△水▽の「異常性」、そのように描いた太宰の「異様な関心」と関わらせて把える考え方の、当否、ということである。というのは、此方もそうした作品表現上の（或いは表現者としての太宰の）異常性という事実を、最終的には「入水体験」と結びつけて（即ちその前提として鎌倉海岸心中未遂は投身《が、少なくとも主要素》だったとして）納得しているのが大勢だからだが、その上に、こちらは入水体験云々が主題や結論ではないからそれが一往否定されても作品表現上の異常云々は生きていて、その異常の因たりうるものとしての入水のイメージをもくすり続けさせるよう陰微に作用する、という厄介さがある。

それでは葉蔵の入水以外の形の太宰作品の△水▽にはどのような異常性があるか、となると、ここでも、恐らく先入見による（とでも考えるしかない）誤読、拡大解釈、又はその逆の見落し等々が、安易に通行しているように思われる。

例えば前引、平岡氏「その収束するところ」で、「人間失格」のヨシ子が商人に犯される直前の場面での「罪と罰をアント（引用者註、対義語）として考へたドストの青みどろ、腐った池、乱麻の奥底の、……」と転回して行く主人公の思念を「水死した女のイメージではな

いのか」と考え、犯された後の「ヨシ子が一夜にして黄色い汚水にかわるのはむろん水死に匹敵する」と断定する。事実問題として睡眠薬自殺の用意はするものの水死は考えもしないヨシ子が水死のイメージでとらえられるのは、氏が「ツネ子（さきに主人公と鎌倉の海に投身して一人死んだ）の水死がヨシ子の上にかげを落としかけているのではないかと」考えるからだろうが、影を落される側からいえば、黄色い汚水Vというのは「その年の暮」に自殺の用意が露見（用意をした時期は不明だが）する数ヶ月前、「むし暑い夏の夜」に犯された直後のヨシ子の身の比喩であって、時間的にみて、水死ならぬ睡眠薬自殺（その差違は無視するとして）も、まだその想念さえ、ヨシ子の身に関わっては存在していなかったのではないか。ツネ子の水死が、水死はしない別人の、他の方法での自殺も思い浮かんでいない時期の、水死Vとは全く別の事柄にまで影を落しているという解釈を、論理的に了解するのは容易ではあるまい。へ青みどろ、……Vにいたっては直前にしろとにかく犯される以前、従ってまだヨシ子は「青葉の滝のやうにすがすがしく思はれてゐた」時点での、それゆえヨシ子の身とは全く関係なく、普遍的な人生の観念から主人公の脳裏に浮かんだイメージであって、それがどうヨシ子に関わって行くのか、又ツネ子の水死からはどう繋がっているというのかも、理解に苦しむ。

また、影を落す筋道とは別に、落される影そのものについて見ても、ツネ子の水死なら当然海のイメージだろうが、へ青みどろ、……乱麻Vは間にへ池Vという語を挿んでいるので全体池中のそれととるべきだろうし、へ黄色い汚水Vを特に海中に流れ込んだそれと読みとるのは無理だろう。

そもそもツネ子の水死は、なぜ、影を落しそうな所に、ツネ子とは思われない影を、疑われるのか。作品中に描かれている限りのツネ子は、主人公がその後に出会う二人の妻、シツ子及びさきのヨシ

子と比べても、その中で最も重いと見ることは可能でも、ただ一人そここのイメージに影響し得るような、とびぬけて強大な存在とは受け取り難いのではないか。平岡氏は描かれたツネ子に実在田部シメ子さん、彼女が太宰の心に残した重み、太宰作品での描かれ方を重ね合わせて判断したのかも知れないが、もしそうであれば、そういう判断し方の可否は措いても、描かれた限りでは——作品本文に関しては、氏の説くイメージの連鎖という、一種偏執的・強迫心理的な作品構造は認められなくて当然ということにもなるだろう。

最晩年の作品「人間失格」の例を最初に取上げてしまったが、その三年前の書き下し創作集『お伽草紙』の第二篇「浦島さん」には、これは確かにユニークな、「冥途もかくや、蕭寂たる幽境」の海底の世界が延々と描かれている。案内役の赤海亀が浦島に向かって云う、「あなたの御想像は、まあドンチヤンドンチヤンの大騒ぎで、大きなお皿に鯛のさしみや鮪のさしみ、赤い肴物を着た娘つ子の手踊り、さうしてやたらに金銀珊瑚綾錦のたぐひ」で飾り立てた御殿、というのは極端な戯画化としても、近代社会では浦島譚は童幼向けに限られてしまっていたから、本質的にはこれと異なるどんな成人用のイメージもあったわけではない。だからむしろ成人にとっては、従来のイメージを変えたというより空白だったところに初めてイメージ（成人の思想に堪える）を与えたと云う方が正確かも知れないが、それなら一層、海底の世界に対する太宰の関心の強さであり、通常成人の関心は海底の世界の幻想などに向かわず、向かって長く執しはしないものだとするれば、太宰の異常さであろう。

しかしその異常とは、具体的にはどのような異常なのか。

太宰の描く海底は「あけぼのの如き薄明」で、「真珠の山の裾に蛍光を発してちよこんと立」つ「案外に小さい」竜宮の正門を入ると「壁も柱も何も無」く、「薄闇が、ただ漾々と身邊に動いて」おり、森



閑とした中に乙姫の弾く琴曲「聖諦」は日本の琴の音に似てはいるが「もつと柔かで、はかなく、さうしてへんに嫺々たる余韻があ」り、「可憐な、たよりない、けれども陸上では聞く事の出来ぬ氣高い凄しさ」が、その底に流れてゐる。幽かに笑ひながら乙姫が出迎えたのは「万畳敷とでも言ふべき広場」で「どこから射して来るのか樹陰のやうな緑色の光線を受けて、模糊と霞」み、「叢のやうな小粒の珠が敷きつめられ、ところどころに黒い岩が秩序無くころがつてゐて」、「小粒の珠のすきまから、ちよいちよい紫色の小さい花が顔を出してゐる」だけ、「屋根はもちろん、柱一本も無く、見渡す限り廃墟と言つていくくらゐの荒涼」さだが、「ここが竜宮」なのであった。

浦島はここで「無限に許され」、何の接待もされない代り全く勝手気ままに、さまざまな味の藻を食べ桜桃の花の酒に酔って幾日かを過ごすうち、やがて「許される事に飽き」、「お互ひ他人の批評を気にして、泣いたり怒ったり、ケチにこそそ暮してゐる陸上の」「貧しい生活が恋しく」なり、「たまらなく可憐で、さうして、何だか美しいもののやうにさへ思はれて来」て暇乞いをするのは定石通りだが、帰途についてもなお、客観的・一般論的な価値判断としては竜宮を「あんないところは、他に無い」「いつまでも、あそこにあるたはうがよかった」と賛美し、その評価とは別の特殊・個別論的に「私は陸上の人間だ」から「あんないところで遊ぶ資格は無かつた」のだ、と、いわば宿命と悟って諦めようとするのだが、そのこと自体「げつそりする」思いで、淋しさに「やけくそに似た大きい声で叫ん」だりもする。作者太宰の口吻にも、玉手箱を開けて三百歳の老人に変わったことを「年月は、人間の救ひである。／忘却は、人間の救ひである。／竜宮の高貴なもてなしも、この素張らしいお土産に依つて、まさに最高潮に達した観がある」と肯定する結末まで、浦島の竜宮傾倒に對して諸語はあつても皮肉や反語は見られない。

ところが浦島の、そして太宰の、そうした絶対的ともいえる肯定に對して、この作品の海底描写が「理想郷というよりも、むしろ、死の国、冥途を表現する描写に近い」とする森安理文氏の説（昭43・2新生社刊『太宰治の研究』『魚服記』）がある。氏は、日本の古代文学に於て「海底にあると伝えられてきた、妣の国も、またこういう暗い寂しい場所」だったことを思い合わせ、その外見の類似によつて、妣の国が恐怖の対象から憧憬の対象に変わって行ったという思想史的事実を「太宰の水に對する恐れと、やがてその恐れが、憧憬に変わっていく変化」といふ仮説の心証（？）とし、「浦島さん」の海底描写をその恐怖要素の発現と見るのだが、ここには改めて指摘するのが気がひけるやうな論理の逆立ちがある。まともな論議としてはまず「浦島さん」の海底描写が△死の国△的であることが論証され（「荒涼」という評語があるから死の国だろう、では話にならない。「これが幽邃の極といふのかも知れない」ともある）、次に、より早い作品にはより徹底した恐怖が、又後の作品には憧憬があることが確かめられて△変化△が承認され、最後に、日本古典への関心などという一般抽象論でなくて海底に對するイメージがそれに同化される迄に記紀を味読したことが証されて、はじめて太宰の海底と妣の国という思いがけない結びつきに驚嘆する、という順序でなければならぬまい。

今さしあたって日本文学伝説論や太宰文学総説は措き、「浦島さん」の海底描写評だけについていえば、かりに、別の文学作品での死の国の描写にどれほど近似していても、又自分だったら死の国以外こうは書かない、と思えても、とにかく太宰は死とか恐怖とかを一語も記さず、むしろ逆に「不安の無いところ」「風流の極致」という類の評を繰返し述べているのである。竜宮に對した時浦島が「静かだね。おそろしいくらゐだ。地獄ぢやあるまいね」と洩らし、「よくまあ、こんな心細いやうな場所で生活が出来るものだ、と感嘆」したのは、あくま

で物理的な静寂、殺風景さに対してであった。中原中也詩の或る物のように言葉をそのまま受取っては意味が通じにくい場合には、太田静一氏の解釈のような試みも一つ一つの解の可否は別にして意義もあるうが、饒舌すぎる程述べ尽くしている感じの「浦島さん」の語句について、作者は甲と書いているがここでは乙と感ずるのが人間の本性 etc なのだから、甲という語は乙という意味の筈だ、と（例えば最も不安がないのは死者だから「不安の無いところ」とは死後の世界の暗喩だ、等）積くのは、どんなものか。しかしそうでもない限り、この作品自体から「海底に幻想した恐怖と憧憬」などというそれこそ異様なモチーフ、ひいては異様な作者の内面を勘ぐるのは無理と思われる。

最後にしめくくりとして、こういう論議で常に例証に引かれる「創生記」（昭11）冒頭部分の、「婦人雑誌ニ出テキタ、潜水夫タチノ座談会」によるという、さまざまな水死者達の形姿を描いた幻想場面にもふれておかなければなるまい。

「婦人雑誌……座談会」という、太宰が自文の典拠と称する記事は、渡部芳紀氏によれば婦人画報社刊『奥の奥』十一年九月号の「水死人三千人を引揚げた経験」かという（昭60・11『解釈と鑑賞』、「評釈『創生記』」が、渡部氏も未見というその記事と対照しなくとも、海の底で青い袴の女学生が「昆布ノ森ノ中、岩ニ腰カケテ考ヘテキタ」とか、白い浴衣の男が「砂地ヘドツカトアグラカイテ威張ツテキタ」とか、総じて水死人は「サマザマノ姿デ考ヘテキルサウ」だという捉え方が、原拠の記事のものとは考えられないし、川での水死者は「男ハ、キマツテ、頭ヲマヘニウナダレ、女ハ（略）胸ヲ張り、顔ヲ仰向ニシテ、底ノ砂利ニ、足ガ、カスカニ触レテキルクラキ、スツクト爪サキ立ツテ」「川ノ流れニシタガツテ、チョンチョン歩イテキル」、「丸

マゲ崩レヌヒトリノ女ハ、ゴム人形ダイテ歩イテキタ、ツカンデ見レバ、ソレハ人ノ児、乳房フクンデ眠ツテキタ」というのが実景である筈がない。太宰の独自の、甚しい幻想であるのは明らかで、それを異常と云いかえても勿論差支えない。

しかしそれは、佐藤春夫が説いたように「太宰がかつて蛤にならんとする雀の如く海に入つて、彼の情婦だけは海底に沈み、彼ひとり荒磯に打ち上げられて発見されたといふ事実を知つてゐたならば（略）自然と了解される」（『芥川賞』、昭11・11『改造』）もの、いいかえれば投身心中の前歴・記憶とのみ、かつ強固に、結びつく性質のものだろうか。

或る幻想の性質は幻想の対象・根拠となつた事実・素材から逸脱した方向と、程度によって測られようが、「創生記」の水死人達は現実にありうる形姿から生々しさ・惨たらしさを洗い落し、無生物・人工物的に、マネキン人形かパノラマ内の群像ふうに変えているのではない。浴衣姿の男は絶息するまでの間の水中での苦悶を感じさせず、爪先立って歩いている女や無理心中（？）の母子は生活苦も絶望もうかがわせないだろう。いうまでもなくこれと逆に、現実以上のどぎつさに走る幻想もあるわけで、順序不同に挙例すれば江戸川乱歩・横溝正史・谷崎潤一郎や近年のスプラッター・ホラー映画と、この「創生記」の水死人達と、どちらが、相手を死なせた投身心中の体験者のなした造型だと説明されて成程、やはり、と思えるものだろうか。人間心理の因果関係は多様だから、酸鼻な体験をもつゆえに逆に、人魚姫か、せいぜい鏡花風の海底幻想しか、恐ろしくて想い描けない、という場合もあるうが、筆を拘束するほどの恐怖感が残っているなら太宰はそもそも水底の場面など取上げなくてよかったのである。筆を拘束するほどの強烈な体験の結果としてありうるのは、凄惨な水死（体）を心ならずも描いてしまうという形だけであろう。しかしげんに描か

れたのはそれと反対の、対応する私生活体験など（子供の頃の夢はべつ）ありそうにないメルヘン風の幻想である以上、「創生記」のこの場面から、太宰の、表現上の嗜好性癖といった内面的現象の域を越えて、生活歴をも包含するところの実生活者像の異常を（正常、もだが）云々するのは牽強付会といわざるを得ない。

佐藤春夫がいち早く「創生記」の水底幻想を作者の心中体験と結びつけ、同時に「創生記」によって心中体験の存在とその異常性を強調した（鎌倉事件の動機は佐藤文のように「蛤にならんと……」といった超俗的なものではなく、生家からの義絶に対する絶望にしろ反抗にしろ、もっと日常生活次元のものだったのではないか）心理的要因——佐藤の鑑賞眼を曇らせた個人的事情といったものは、臆測できなくはない。そもそも佐藤の「芥川賞」のモチーフが、「創生記」付載「山上通信」の第三回芥川賞選考に関わる佐藤の言動というのを太宰の妄想として葬り去ることであってみれば、意識無意識はともかく、太宰を生活歴・性格・日常の言動から作品表現まで、その及ぶ範囲も表われ方も一二にとどまらない、根っから・丸ごとの異常者としたかったろうことが考えられる。

しかし我々読者には関わりのないそうした周辺の事情を取り払って、作品本文のみを眺めれば、判断を躊躇させるようなものは何もあるまい。パビナール中毒により精神の安定と抑制を欠いた、生活者としても作家としても生涯で最も危険だったといわれる時期の作品に於ても、太宰のハ水Vの異常さは、いわば文芸的な一つの趣向としてのそれと見るべきものであった。

ついでにもう一つ。昭和五年の鎌倉事件に最も近い時期の作品「魚服記」（昭8）にも、少女スワが滝に飛び込み、「薄暗」くて「滝の轟き」も「幽か」な水底で鮎に変身する件がある。発表の同月、八年三月一日付の木山捷平宛書簡によれば、太宰は「仕事に取りかゝる前か

ら」考えてあった「三日のうちにスワの無慙な死体が村の橋柱に漂着した」という結びの一句を、「作品の構成」の「破たん」を恐れて後から削り取ったのだという。時間的な近接と筋立ての上で、鎌倉事件（が投身だったとすれば）を元にしたのではなくても進行途中で自ずと引きずられてもよさそうなこの作品でさえ、自分の力量を考えて「大それた真実迄に飛躍させること」を断念し、「作品の味がずつとずつと小さくなるのを覚えつゝ」、現実の悲劇的な水死とせず夢幻の変身譚に取り収めたというのである。作品に対する作者のこのような意識を押しつけて、異常性格（や、まして異常体験）のまにまに流れ出た（或いは加圧成型された）もののようにもてあつかうのは、どう考えても不当であろう。

かくて大庭葉蔵は、作品の中にのみ、かつ、作品構造の枠以外の何物からも自由に生きる登場人物像として、小説の読者の前に戻って来たはずである。

**補説** 作品中とは別に日常生活での言動で、太宰が海や湖への激しい恐怖を示したことが、山岸外史・桂英澄氏らによって伝えられている。しかしそれらは常にハ投身心中の経験者Vという認識と結びついて記憶されているので検討は省略するが、更に山岸氏は心理的な恐怖以外にも「太宰はたしかに泳げない男だったのである」（昭37・10筑摩書房刊『人間太宰治』『太宰と恐怖』）と明言する。だが氏自身も付言する通り、太宰としては最も素直な自然風になつてた「思ひ出」（昭8）には、「中学校にはひるやうになつてから、私はスポオツに依つていい顔色を得ようと思ひたつて、暑いじぶんには、学校の帰りしなに必ず海へはひつて泳いだ」少年の、「波の起伏のこまかい編目も、岸の青葉も、流れる雲も、みんな泳ぎながらに眺められる」という観察もあり、半生の回顧

形式の「東京八景」(昭16)にも「私は泳げるので、海で死ぬのは、むづかしかった」とする。もっとも「乞食学生」(昭15)のように「私は、泳げない」とする例もあり、作家の自画像を、信用した<sup>1</sup>らき<sup>2</sup>りが<sup>3</sup>ない、<sup>4</sup>ということかも知れないが、それならば日常の交際の間での、とくに友人間の信義云々という程ではない事柄について与えようとする印象も、また同様だろう。それに、作者は泳ぎが出来ないからその作品は等と云い出したら、おそらく、少なくとも戦前の作家の何割かに「国民皆泳」という戦争中のスローガンは何の為にあったか)異常を疑ってかからねばなるまい。入水体験云々についてもそう云いたいのだが、それに比べても遥かに、<sup>5</sup>泳げた・泳げない<sup>6</sup>は作品理解とは別個のエピソードとして楽しめるべきであろう。

(昭62・3・31稿)